
にときすっ！

回鍋肉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にときすっ！

【Nコード】
N6053U

【作者名】
回鍋肉

【あらすじ】
河童の川城にとりは釣瓶落としのキスメと出会う。最初は桶にしか興味の無いにとりであったのだが・・・

ぶろろーぐ（前書き）

にときす流行れ

ぶろろーぐ

愛用のスパナをくるくると回しながら部屋を歩き回る。なんということだろう。私は悩まされていた。

一人が入れるとかいう目の前の桶に。

「こんな木製製品なんかになんか。」

おかしい。どうやったってこの中に人が入ることはできないはずだ。小さすぎる。納得いかない。

気付けば時間は午後の5時くらい、全く進展が見られないまま半日も過ぎてしまった。

スパナが回っているのは調子が悪い証拠だ。作業に入ってしまったば回してる暇なんてないからね。

しかしこの子は楽しそうだ。よっぽどのことがないと桶から出てこないような内気な子だとか言ってたはずんだけど……ラボの中を走り回るちっこいのを見て今日の出来事を思い出す。

今朝、珍しい奴がやって来た。奴らは川を汚すので私は警戒してたんだけど、それ以上に私は奴の塞がった両手が気になったのだ。

「他に頼み口が思い付かなかったの。」

右手に桶を持ち、左手は少女の手を握っている。この組み合わせの意味はなんだろう。少女の方は初めて見る顔だ。地面から桶へと視線をちらちら動かしている。彼女の物なのだろうか。

「……………なのよ。」

しかし彼女はなぜあんなにも不安そうなんだろう。何か見えてるのかな。桶にも特別変わったところは無いように見える…けど霊とかその他の類なら専門外だし

「ちょっと聞いているの？」

「ひゅ！？」

不機嫌そうな顔が覗く。なーんにも聞いてませんねはいはい。

興味は尽きなかったけど、とりあえずは話を聞いてみることにしよう。

「んで？」

「聞いてないのね。」

あ、呆れた。

「この子が桶に入れなくなったの。」

意味不明。両手を上げて説明を要求する。

「言葉のままよ。」

思わず笑ってしまった。

「この子がーって入れるわけがないじゃん。容量的に無理ムリ。」

「いつも中に居たんだってば。」

こくこくと首を縦に振る少女。えー。ないよー。

桶を覗き込む。底が見えるけどいたって普通。何の変哲もないふつーの桶。

しばらくあーでもないこーでもないと話をしているうちに少女が桶から本を取り出した。

私は依頼を受けることにした。

ぶろろーぐ（後書き）

続きを読む意思がおりの方はサイトのコメント、あるいは@ssamihara0009（twitter）までどうぞ。

一人でもいれば投稿いたします。

そのいちっ コーヒーは砂糖多めで（前書き）

河童の河城にとりは不思議な桶に興味津々なようです

そのいちっ コーヒーは砂糖多めで

「じゃあ、お願いするわ」

「ほいほーい」

桶を受け取る。もう私の目にはそれしか映っていなかった。すつこい気になる。どこから本が出たんだろ？他には？本当に人が入れるとしたら…

私はラボに籠って桶の調査を始めた。寸法や重さはもちろん、木目の入り方まで、もう徹底的に。

「うーん、やっぱりふつーの桶にしか見えないなあ」

数時間費やして自分の答えは「ただの桶」だった。そんなわけない、私は確かに底が見える桶から本が出てくるのを見たんだよ・・・証拠はないけど。まさかあの二人に担がれてるとか・・・

いかん、思考が悪い方に傾いてきてるよ、リセットリセット。

私はコーヒーを煎れようと給湯スペースに向かう。科学者が飲むのはコーヒーと相場が決まってるんだよ。

「あれ？」

調査に没頭していて気が付かなかったけど、ラボの中はコーヒーのいい香りに満ちている。ポットを見てみるとうん、やっぱり入ってるぞ。

私は砂糖を入れながら思わず辺りを見回してみる。誰もいない……
よね。

いつの間に私はコーヒーを煎れたんだろうか。集中していると無意識に計算式を書いている、なんてことはよくあることだけどまさか無意識のうちにコーヒーまで煎れてしまうとは。無意識も便利なものかもしれない。何とか実用化できないかな。地底に凄い無意識少女がいるとか天狗が言っていた気もするし……

「あれ、砂糖何杯入れたっけ。」

混ぜると底の方でじりじりと音になるコーヒーを持って戻る。
これはひどい。

ぐるぐるじりじり、ぐるぐるじりじり。うん、ちょっと楽
になったー……と。

「？」

さっきまで作業していた机が綺麗になっていた。いやいやいやこれは誰がいるよ間違いないよ。なんだか逆にわくわくしてきたかも。分析してみる。出来事からみて間違いなく気遣いができる人だよこれは。

「桜か、雛か……。」

ぱっと思いつくのはそんなところ、でも二人とも隠れるのには向いてないんだよなあ……。

可能性を絞り込む。検索結果0件。だめだこりゃ。

一通りラボ内を見て回ったけど特に変わったことも無いようなので作業に戻ることにする。次はどれぐらいの物が入るのか実験してみようか。

これで容量も普通なら本当にただの桶だよなー。つまらん……。あ、ペン落とした。

落ちたペンを拾うためにしゃがんだら、

机の下で、目が合った。

「!?!」

衝撃、転げまわる。頭部を強打してしまった。うつつ。

今は奴と一緒にいた子だ。なんでここに、いるん、だろ

「話をしよう」

落ち着いたところで緑の子を座らせる。まずは名前、名前を聞こう。

「君、名前は？」

「……。」

「ええと……。」

話を聞いてないわけじゃなさそうなんだけど・・・おお。理解理解。
身振り手振りから判断して紙とペンを渡してやると何やら書き始める。

（キスメ）

「キスメか。それじゃあキスメ、なんでまた私のラボにいるんだい？」

「……。」

桶を指差す。そしてまた書き始めた。

（すんでる）

すんでる・・・？ああ、住んでる、うん・・・あれに??

表情から読み取ったのか、てくてくと桶のほうに歩いていき、入ろうとするが、入れない。当然だよ。その桶はこの私が隅々まで調べたんだか・・・ら・・・

「え!？」

繰り返しているうちに、消えた。興奮して駆け寄る。

・・・と、キスメはそれはもう無理な体勢で桶に詰め込まれていた。

「無茶するなよ！」

涙目になっていたところをなんとか救出。住んでるってまさかあんなふうにも入っている・・・ことではないだろう流石に。そうなら逆にすごいけども。

「桶に入ってたときはどんな感じだったんだい？」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

今度は長かったな、と見ると絵だった。

「絵、上手だね・・・。」

「・・・・・・・・。」

照れてる可愛いな、ではなくこの絵だ。もしこの絵の通りならこの桶は見た目からは想像も付かないとんでもない代物ということになる。誰が作ったんだろう。どんな技術が用いられているんだろう。調査意欲がもりもりわいてきたぞ。

「・・・・・・・・。」

この桶について一番詳しいのは製作者、次いで多分この子だろう。

それならこの子と仲良くなることがこの桶の謎を解く一番の近道な
んじゃないだろうか。

私はコーヒーを飲んだ。むせ返るくらい、甘かった。

そのいちっ コーヒーは砂糖多めで（後書き）

ふう、第一話、なんとか形にはなりましたね。基本的に自己満足で書かれていますので肌に合わない方はすみやかに使用の中止をオススメしますw

第二話はいつ頃になるかなー、神居祭の原稿次第だなー（汗

にときすっ！そのにつ もお楽しみにー

わきみち 作り物の天の川（前書き）

七夕突発企画です。短いですがご了承くださいませ

都合上本編とのずれもあります。

わきみち 作り物の天の川

「・・・・・・・・・・」

きゅっ。きゅっ。手に力を込める。

きゅっ。きゅっ。ネジを締めるたびに気持ちが高まる。自分で作った機械の最後のネジ締めは達成感には他に代えられないものがある。私は思う。外の世界には勝手に締めてくれる器具があるみたいだけど、そんなもの河童には必要ないね。こういうのは無駄があるから面白いんだよ。

きゅっ。きゅっ。

「・・・・・・・・・・?」

今日はキスメがやたらと外の様子を気にしている。空は灰色、雨は降ってないけどなんとなくじめつとしてる感じ。

きゅっ。きゅっ。

「ようし、出来た・・・。」

とりあえず汗を拭こうかなー、と洗面台に向かおうとしたんだけど・・・いつの間にかタオルが手元に置いてあった。いつもながらなんと気の利くことだろうか・・・助手に欲しいくらいだよ、さて。

「今日はどうしたんだい?」

背中越しに聴くと、キスメはカレンダーを指差した。うーん。今日何日だったっけか・

頭を掻いているとキスメはすつと7月の7日を示す。

7月7日・・七月七日・・ああ、七夕か。織姫と彦星が一年に一度だけ会える日・・だったかな。正直言い伝えなんてどうでもいいんだけど、天体観測をするのも悪くないかな。

「よし、星でも見にいこつか。」

「・・・・・・」

おおう、すごく喜んでるぞ。まあ喜ぶところを見たくなかったかと言われれば嘘になるんだけど・・ね。

・・・・・・

「よ、よし、お団子作るつか。」

うなずく。お団子を食べながら夜空を見るのは別の日だったような気がしないでもないけど、大した問題じゃないさ。うん。楽しい夜にしようじゃないか。

お団子を詰めて、望遠鏡を持って、ドアを開けた。

「・・・・・・・・・・。」

そのままドアを閉める。上手くないもんだなあ・・・。

キスメはぱつと見た感じ平然としてるけど。わかる。私よりもずっと。

外は雨、意地悪な雲は私達から天の川を遠ざける。

・そっちがその気なら。

「キスメ。」

・私はしょんぼりしているであろうキスメに向かって。

「天の川、作ろうか。」

出来る限り、不敵に笑ってやった・

二人で天井に星を描く。今はまだ見えないけれど。

「・・・・・・・・・・。」

キスメはまだ自分が何をやっているのか解っていないだろう。いや、解ってちゃあ面白くないんだよ。

しばらく黙々とした作業が続く。会話はない。いや、普段通りなんだけどね。

「こんなもんかな。」

椅子にキスメを座らせて、部屋の明かりを全部消す。星が青白く光りだす。

キスメはわぁー、といった感じた。ちっちっ、この河城にとりをなめてもらっちゃー困るよ。

私は一つ息を吸って、完成したばかりのあの装置のスイッチを、入

れた。

部屋中に光が溢れた。その光は眩し過ぎず、見るものをただ圧倒する。

「科学って、すごいだろ・・・？」

聞いているのかいないのか、キスメは星に手を伸ばして。掴もうと
していた。

それで十分。

「やっぱり、無駄って言うのは良いもんだよ・・・。」

二人でお団子を食べながら、一晩中そうしていた。

私達だけの天の川が、ここにはあった。

わきみち 作り物の天の川（後書き）

すべりこみズサー 遅くなっ た！ごめんね！

そのにつ 白、黒、白、黒、赤（前書き）

キスめは思いを口には出してくれない。さて、どうやってコミュニケーションをとろうか。

そのにつ　白、黒、白、黒、赤

ぱしっ、くるん。

「……。」

ぱしっ、くるんくるんくるん。

「えっ。」

ぱしっ、くるんくるん。

「くっ……。」

盤上はほぼ白に染まっていた。四隅全てを奪われてしまった私に勝ち目は無い。

「……っ、参った」

この子と会話するのは骨が折れそうだな……ってことで自分が選んだコミュニケーション手段はオセロだったわけなんだけど、まさ

かここまで強いなんて・・・。

しかし、次は何が良いかな。相撲…は流石に出来ないし、将棋は初めての人とやるには向かないし…。

「キスメは何かやりたいことあるかい？」

「・・・・・・・・。。。」

聞いてみると、キスメは画用紙とペンを持ってきた。スケッチか。仕事柄わりと得意な部類に入るよ。

「よし、じゃあ30分くらいで一枚描こうか。」

私は愛用のコーヒークップを机に置くと、それをイメージとして紙の上に投影する。あとはそれを紙の中に線として表現するだけだ。

「・・・・・・・・。。。」

窓からは涼しい風が吹き、部屋の中にはペンと紙の擦れるさらさらという音だけが響いている。なかなか快調だ。

「・・・・・・・・・・。」

なんだか視線を感じる気がする。しかし今自分はスケッチで忙しいのだ。気にしている暇はないよ。

「・・・・・・・・・・。」

時間はあと二分ほどか。そろそろ仕上げに入ろう。

「よし、30分だ。」

ペンを置く。続いてキスメの方も描き終えた。

「よし、じゃあ私からいくよっ、じゃーん!」

と描きあがったコーヒークップを見せる。我ながらなかなかの出来ばえだろう。ふっふっふ。

「・・・・・・・・・・。」

キスメが描いたのは・・・私の椅子だ。この微妙な形状はまさしく

それ。

「？」

でも、なんか、粗い・・・？まるで急いで書きなぐったみたいだ。
キスメはとっても絵が上手だったはずなんだけど・・・。

ちらりとキスメの目を見る。

「！・・・。。。」

その目の揺らぎを私は見逃さない。

「キスメ・・・何か、隠してない？」

「！！・・・。。。」

首を振るキスメ。私はじりじりとキスメに詰め寄る。もはや目の焦点が合っていない。観念しろ・・・。

わたしが詰め寄るまでもなく、強い風がキスメの手から画用紙を飛ばした。キスメよりも早く、私が拾い上げる。キスメは大慌てだ。
可愛い。

椅子の絵が描かれた画用紙、その裏には・・・

私がいた。

さっき感じていた視線の正体はこれだったんだ。キスメはずっと私を観察してそれを絵に・・・なんだか恥ずかしくなってきたぞ。やっぱりキスメの絵はとっても上手だった。対象を良く見て精密に、良く見て描いているんだろう。キスメは顔を真っ赤にして取り返そうとしている。私は今、いったいどんな顔をしているんだろう・・・？

その後仲間の河童が尋ねてきて、「今日はやけに嬉しそうだね？」なんていうもんだから即のびーるアームしてしまったのは内緒である。

そのにつ 白、黒、白、黒、赤（後書き）

相変わらず短いですね w

ちまちまちまちま書いてますー

そのいちっ R e v e r s e 伝わらないことば(前書き)

そのさんまでの繋ぎ、ととらえていただければ・・・。

まあ書くことは決めてあつたんですけどねw

そのいちっ

R e v e r s e

伝わらないことば

「じゃあ、お願いするわ」

「ほいほーい」

桶が河童さん（にとりさん、というらしい）の手に渡る。興味津々、といった感じだよ……。

本当に大丈夫なのかなあ……。いや、ヤマメちゃんが頼みに来てくれたくらいだし、この人は信用できるとみてもきつと大丈夫……だと思う。

それでも。

あの桶は、私の家であり、誇りであり、自分の象徴なんだよ。

私は河童さんの後ろに続いてそろり、と研究所に足を踏み入れた。普段の自分からは考えられない行動に自分自身に驚きを隠せないけど、それだけ大切な物なんだと思う。

研究所の中は結構快適だった。暑くもなくまた寒くもない。適度に暗くて……。ちよつと乾燥気味かも。

まずは、研究所の中を把握しよう。そう考えた私は河童さんの視界に気を配りつつ、施設内を歩き回った。きゅうりがたわわに実ったハウスとか、でーんと土俵があるとか、そういう河童的なものを期待してたんだけど、残念ながら無いみたい・・・きゅうりは沢山保管されてたけど。

歩き回っているうちに給湯室を見つけて、私のちょっとしたいたずら心かもわもわと浮かび上がってきた。河童さんはまだ私がいることに気付いていないはず・・・だよな。

河童さんが悩んでいるのをちらりと確認すると、私は置いてあったポットでコーヒーを煎れ始めた。出来には妥協しないんだよ。疲れてるだろうし、ちょっと濃い目のものを・・・。

砂糖と塩を取り替えておくみたいだずらは好きじゃない。相手が嬉しくなるようないたずらが、素敵だと思うの。

うん、良い香り。

・・・・・・（おっと。）

ゆつたりとした足音を聞いて、棚の方に隠れる。もちろんちらりと様子を伺いながら。

「あれ？」

辺りをぐるぐると見回す河童さん。うーんと腕組みをして、砂糖を入れ始めた。

さらさら。

さらさら。

さらさら。

さらさら。

さらさら・・・。

おかしいな、一向に砂糖を入れる手を止めない。考え事をしているみたいで何も見ていないみたい・・・。面白い光景ではあったけど、私はするりと給湯室を後にした。

・・・！

桶の周りが悲惨なことになってる……。道具は出しっぱなしだし、書きなぐったメモが散乱してるし、かじったきゅうりがそのまま置いてあるし。

間に合う……。かな。河童さんだっけ？と砂糖を入れ続けてるわけじゃあないだろうし……。

でも。

全速力で片付ける。今までにこんなに急いだことがあっただろうか。私は飛び回るように机を綺麗にすると、その下に潜り込んだ。

「あ、あれ……。？」

ふふ、驚いてる驚いてる……。河童さんは今どんな顔してるのかな？

あれ……。私はここに何をしに来たんだっけ？こんなことをしにきたわけじゃなかったはずなんだけど……。

かたん

ペンが落ちてきて。

机の下で、目が合った。

「!？」

飛び上がりそうになった。河童さんは頭をぶつけて転げまわっている。痛そう……。ひとまず河童さんが落ちて着くまではおとなしくしていよう。

「話をしよう」

私は促されて、そこそこすわり心地の良い椅子に腰掛けた。

「君、名前は？」

キスメだよ。

「ええと・・・。」

ああ、やっぱり、この人もか。

諦めて私は紙とペンに頼ることにした。

（キスメ）

そのあと、久しぶりに「会話」をした。私は筆談だけど・・・河童さんはまるで普通にお話をしているみたいで、嬉しかった。

この人なら、私の悩みに気付いてくれるかもしれない。

そんな期待をしてみた。

そのいちっ

R e v e r s e

伝わらないことば (後書き)

ちりちり

そのにっ

R e v e r s e

絵は真か、虚か（前書き）

また R e v e r s e なのです、ハイ

そのにつ

R e v e r s e

絵は真か、虚か

私は河童さんを眺めていた。とっても真剣な表情でコーヒークップと向き合っている・・。絵の題材に迷った私は、その様子を描く事にしたんだよ。

「・・・・・・・・・・。」

絵を描くことは多分、みんなが考えてる以上にすごいことなんだよ。河城にとりという存在を、真っ白な画用紙に描き込んで、定着させる。それだけでそこには河城にとりがいるの。オリジナルではないけれど、確かに。

そう、教えられた。

だからこそ、私は絵の題材の観察にはいつも全力を尽くす。その雰囲気も、手触りだって、紙の上に表してみせる。

私はペンを走らせる。河童さんの大きな目も、細い指も、対象を移し変えるだけで余計なことはいらない。あるものをありのまま、紙の中に閉じ込めるの・・。

（出来た・・！）

時間にはまだ五分ほどの余裕がある。私は出来上がった絵を見直して・・・。

「よし、30分だ。」

そう言われて、ペンを置いた。

「よし、じゃあ私からいくよっ、じゃーん!」

(上手い・・・。)

絵からこのカップへの思い入れが伝わってくる。いつも使っているものが今その中にあるだけ、という感じ。とっても良い絵だと思っ

続いて私も、作品を前に向ける。

河童さんはほう、と絵と椅子とを見比べて、

「？」

予想通り、なにか言いたげな表情になった。

ここで目を逸らしては駄目。めをそらしては

「キスメ・・・何か、隠してない？」

「！！・・・。。。」

私は首を振る。河童さんは楽しそうな、でも意地悪な顔をして近づいてくる。駄目。桶にしまってしまおう・・・。

強い風が、私の手から画用紙を飛ばした。私はとっさのことに反応できなくて、河童さんはそれを拾った。

もう遅いってわかってるけど、取り返そうとした。描いてるときに

はなんともなかったのに。描き終わったものを見たら、駄目だった。

椅子の絵が描かれた画用紙、その裏には・・・

コーヒーカップを見つめる、笑顔の「河城にとり」がいた。

そのにつ

R e v e r s e

絵は真か、
虚か（後書き）

次はそのさんっになるはず

そのさんっ 3時のお茶は甘くない(前書き)

最近忙しいよ!!w

そのさんつ 3時のお茶は甘くない

「よいしょ。」

仕掛けをくい、と引つ張ると小気味よい音を立てて傘が開く。

これは自信作だ。椀には傘の修繕を頼まれたただけなんだけど…

思いついたら即実行するのは研究者の性ってやつだよね、うん。

さて、時計も3時を回ったところだしお茶にしようかな…と思ったところで丁度キスメがお茶の乗ったお盆を持ってきた。

まるで私の考えることなんてお見通しとでもいわんばかりの気の利き様…そんなに自分はわかりやすいんだろうか。

ええい今そんなことはどうでもいい、喉がからからだよ…。

喉が渴いていてもお茶請けは欲しいので戸棚を探す。

おせんべいとお饅頭・・・どっちが良いかな。どっちでもいいこと
って悩む・・・。

「にとりはいますかー!」

はいはいいますよっと。

「傘ならできてるよ、持ってってー!」

「実は良い物持って来たの!」

ほう、良い物ね。

椀もテーブルについて三人になった。早速椀の持ってきた新聞包みを開く。

出てきたのは・・・

「かりんとう、だね。」

「ただのかりんとうじゃないんだよ!天狗でもなかなか手に入らないんだから。」

キスメはじつとかりんとうを見ている。地底にお茶を飲む習慣はなかったみたいで、新しいお茶請けにはいつも興味しんしんだよね。

「そいじゃ、いただくか。」

「いただきまーす、えい。」

ばさっ

食べると同時に椀が傘を開いた。うんうん良好良好。

「おお・・・！」

ふっふっふ、良いだろう・・・。あ、このかりんとうまい。

これはおいしいねー、とキスメを見た。

「・・・・・・・・。。。」

一口かじって固まっとる。今まで色んなお菓子を食べたけどこんな反応は初めてだぞ・・・！

「キスメー、おい。」

手をひらひらさせる。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。！」

あ、帰ってきた。

「・・・・・・・・。」

なんか一人でうんうん頷いてる・・・大丈夫か。

「この子、かわいい・・・。」

えっ。

見る。やばい。椀は椀でどこかへ暴走しそうな勢いだ。さつさと返
してしまおうか。

キスメはもそもそもそとかりんとうを食べている。可愛い。じ
やなくて!!

どうしてこうなった・・・!

キスメのテンションがこんなに高いのも始めてみたし、椀のこんな
一面だって知らなかった。

3時のお茶会は、この後3時間続くこととなる・・・。

そのさんつ 3時のお茶は甘くない(後書き)

そのさんつ R e v e r s e はあるのかな、そのよんつが先にな
るのかな

そのさんっ

R e v e r s e

その甘さは天にも昇る（前書き）

カオス回

そのさんっ

R e v e r s e

その甘さは天にも昇る

私はお茶の用意を着々と進めていた。

なんでも白玉楼から仕入れているとかで（どこのことだかは知らないけれど）とっても良いお茶なんだよ。

沸騰したお湯を少しだけ冷まして、急須に茶葉を…

「にとりはいますかー！」

と、お客さんだ。誰だろう。

「傘ならできてるよ、持ってたー！」

「実は良い物持って来たの！」

これはもいつこ必要になるかな。

私は湯呑みをもう一つ置いてにとりさんの袖を引く。

「ああ、こいつは白狼天狗の権っていうんだ。よく一緒に将棋をしたりするんだよ。」

権さん、覚えた。

権さんもテーブルについて三人になった。にとりさんが包みを開く。

出てきたのは・・・なんだろう、これ。

「かりんとう、だね。」

「ただのかりんとうじゃないんだよ！天狗でもなかなか手に入らないんだから。」

かりんとう・・・話には聞いたことがあるけどこんなに真っ黒なもの・・・だったんだね。なんだか食べるものにはみえないなあ・・・。

「そいじゃ、いただこうか。」

にとりさんが言う。

私はおそろおそろ、「かりんとう」を口に入れた・・・。

さくっ

途端、 なにかもどうでもよくなった。

その甘さはしつかりとてかつしつこくない。この甘さだけでも良質なお菓子だけれどなによりもこの風味だよ。今までに食べたお茶請けのいずれにもないこの独特の風味は、これこそが至上の菓子であると私に訴える。

「キスメー、おーい。」

このお菓子はどやって作るんだろう。たくさん作ってお茶と一緒に食べ続けていたい・・・！

「きーすーめー」

「・・・・・・・・・・。！」

にとりさん、今は邪魔をしないで・・・！！

原料は小麦粉とお塩に砂糖、砂糖は黒砂糖がいいかもしれない。小麦粉をお水で練ってお塩を加える。お砂糖は煮詰めて蜜にしないとね。棒状にした生地を油で揚げたら蜜を絡めて乾かせば・・・うんうん、これで出来るはず・・・！！

私はイメージを固定化するためにひたすらかりんとうを食べる。

この味を、忘れないように。

お茶をくいと飲み干すと、私は真っ直ぐに厨房へと向かった。

私の戦いは、これからだよ。

そのさんっ

R e v e r s e

その甘さは天にも昇る（後書き）

キスメちゃんはかりんとうが大好きです！！

超自分設定

そのよんっ カウンtdown(前書き)

#レポートにつぶさねそう

そのよんっ カウントダウン

「・・・・・・・・。。。」

汗が頬を伝う。 静まり返った研究所で、私はじっと机に向かっていた。

「君ならなんとかなるんじゃないかって言われてね。」

そう言っ て依頼してきたのはがらくた屋香霖堂の店主である。

「これは音を取っておくことが出来る物だってことはわかるんだけど他はさっぱりなんだ。。。」

頭をかく店主。やれやれ相変わらず役に立つんだか立たないんだか
良くわからない能力である。

面倒事であつても興味を引かれれば二つ返事、というのが河童らし
さ。勿論即答で引き受けることにした。

なに、キスメの桶の摩訶不思議さに比べればこの程度のものはなん
てことないね。

ちなみにキスメは今ここにはいない。今朝から椀に連れられて川へ
行っているから。

あの奇妙なお茶会から、椀がここを訪れる機会が異様に増えた気が
する。というか、増えた。間違いない。

・・・やっぱり人がいるかないかで雰囲気は変わるもんだね。キスメに会わなかったらこんなことにも気付けなかったのかもしれない。

「この私が研究中に関係ないことを考えるとね。」

。 出会いは人を変える・・・か。非科学的なことではあるけれど・・・。

出会いは人を変える。それは人であったり物であったり、また場所かもしれない。

栞は以前、そう言っていた。

私はこの時何も考えていなかった。ただ、音を取っておく機械を直してただけ。

まさか…ね。

何かが、足音を立てて迫っていたらしい。

私は、「ボイスレコーダー」を完成させた。

そのよんっ カウントダウン(後書き)

色々考えてます

そのよんつ

R e v e r s e

帰る。

(前書き)

予定より遅れましたが

そのよんっ

R e v e r s e

帰る。

ぱたぱた。ぱたぱた。

真新しい新聞紙を広げ、並べて、うちわで扇ぐ。かかすことの出来ない、私の日課なんだよ。

「にとりはいますかー!」

「？」

戸を開けた椀さんはそう言って、何故か私のほづをずっと見ている。

「椀ー？ごめーん今日は忙しいんだよう。」

詰まれた工具で見えないけれど、面倒そうにとりさんが言った。

椀さんは構わず進んで行って、何やら話している。私はかりんとうの湿気管理に戻ろうとして・・・

「キスメちゃんっ」

「？」

「川にいこっか。」

川に・・・私はちらりにとりさんの方を見た・・・さつきと全く変わってないみたい。コーヒーの準備だけでもしてから出かけることにしよう。

わたしは頷くと、コーヒーを煎れに厨房へと向かった。

コーヒーを煎れて、その横にお皿とかりんとうを置く。今日も美味しく出来たんだよ。

そうして、桜さんと一緒に研究所を出た。

外に出るのは久しぶりだ。もともとずっと地底で過ごしてきたし、研究所に来てからも外出する機会はほとんどなかった。にとりさんが毎日研究で籠もりがちだからかな？

にとりさんは、河童さんだ。私は河童といったら毎日川へ行くものだと思っていたから、これは意外なことだった。

家に籠っているのは楽だ。私の生活リズムとも合っている。

でも。

にとりさんと、川に来てみたかった。

今、私は川に向かってる。桜さんはとっても良い人だよ。

「んー？」

桜さんが覗き込む。私はノータイムで首を振った。

今は、川を楽しむことにしよう。

「ここだよ。」

そう言つて椀さんが指差した先には・・・滝があつた。水飛沫が上がり、虹を作り出している・・・

でも、私が目を奪われたのはそこじゃない。

川には、手でつかみ取れるほどの魚の群れ。大きいもの、小さくてとってもきれいなもの。

私は川にそつと手を入れた。小さな魚が指の間をすりどりと通り抜けていく。なんだかくすぐつたいな。

ぴゅっ

ぴしゅっ

「えいつ
」

「？」

見ると、樫さんが魚を取ろうとしているところだった。空振りしても、めげずに何度も何度も挑戦する。

大きな魚がやってきた。樫さんは手を伸ばして・・・あつ。

「あつ？とつ？」

すっころんでしまった。

パシヤッ

「？」

「相変わらず椀はへたっぴですねー」

右手にペン、左手に手帳を持ち背中には黒い翼。新聞屋さんだった。

「あ、文さん！？い、今の撮ったでしょう！いやあ、消して！消してください」

「ふっふーん。そう簡単にいくと思いますか椀・・・？と。随分と珍しい組み合わせですね・・・。たしか今この子は河童のところ
に・・・ぶつぶつ」

私と椀さんを交互に見る新聞屋さん。椀さんはもじもじしている。
そして思いついたように、

「ああ、椀はこの」

「
だっ
」

その時、世界が一瞬白くなった。まぶしくて思わず目を閉じる。目を開けたときには二人がいなくなっていた。

「
? ?
」

「
おい、キスメー!
」

振り返ると、にとりさんだ。依頼されていたものはどうやら完成したみたい。

「あれ、桜は？」

私は肩をすくめてみせる。一体どこへ行っちゃったんだろう・・・？

「仕方ないやつだなあ・・・」

そういうとにとりさんは、川へと静かに手を入れた。小さな魚達は自分からその両手に収まった。

「♪」

「さて、帰ろうか！」

にとりさんは、魚を放してそう言った。

私はにとりさんと二人で、川沿いを歩いて帰った。

二人で、歩いていた。

そのよんっ

R e v e r s e

帰る。

(後書き)

そのごっもお楽しみに・・・

わきみち

B e f o r e

私の、言葉（前書き）

今回は割りと重めです・・・。

わきみち

B e f o r e

私の、言葉

昔の、夢を見た。

私は、ごく普通の妖怪だった。

特別に目立った能力があるわけでもなく、鬼火を落とし、夜道で人間を驚かせることだけが私の存在意義だったのだ。

でも、その生活に不満は無かった。

地霊殿に帰ればさとり様がいて、こいしちゃんがいた。

たくさんお話をして、たくさん笑った。

その日私は人間を驚かせられなかった。がっくりと地底に戻る。

なんだか重い、雰囲気が漂っていた。

・・・なんだろう。とても嫌な感じがする。

さとり様はうなだれていた。私はただいまを言う。

「え・・・ああ・・・おかえりなさい。」

明らかに様子がおかしい。私はさとり様に何があったのか尋ねた。

「ええ・・・。」

「キスメ、おかえり。」

こいしちゃんが入ってきた。さとり様の表情が少し、固くなる。

「今日は、どんなことを、したの・・・。」

私が今日はさっぱりだったよ、と言つと、

「そう、それは良かった。」

えっ・・・

こいしちゃんは、震えた声でそう、言った。

おかしい。会話が全く成り立っていない。私はからかわれているのではないか、とさとり様の方に視線を移す。

それを見たこいしちゃんは、何処かへ走り去ってしまった。何故？

こいしちゃん、泣いてた。

さとり様はうつむいたまま、

「ごめんなさい・・・。」

それは誰に対しての言葉だったのか。

私は、一人でいることが多くなった。こいしちゃんはたまに様子を
見に来るけれど、挨拶だけですぐにいらなくなってしまふ。

私は、普通の妖怪に憧れた。

わきみち

B e f o r e

私の、言葉（後書き）

レポ&テスト&原稿の三重苦

わきみち → JUMP → 感覚言語（前書き）

どうしても田にち空いちゃいますねえ・・・。

わきみち → JUMP → 感覚言語

「いやあ、暑い暑い。」

やはりこの季節の地底取材には辛い物がありますねえ・・・まあ、行くだけの価値はあったので良しとしましょう。

汗を拭きつつ事務所に入る。ああ、室内も暑い。

「文さん、お帰りなさいっ！麦茶が冷えていますよ！」

「じゃあ、お願いね。」

「はい！」

桜は目をきらきらと輝かせて、回っていた。思わず苦笑しつつ、メモに改めて目を通す。

ふむ、しかしこれは・・・桜も厄介な娘を好いたものです。

「キスめ。」

わかるのは名前だけ、姓は不明・・・ですか。いや、妖精のように元々名前しかないのかもしれないね。彼女には決して触れてはいけない部分があるうえ、どうやら好意を寄せている相手がいる・・・。

これは手強いですよ。

しかし私も天狗の端くれ、部下が乙女モードに入っているというのに、それを黙って見ている程の甲斐性無しではないのです。

決して面白そうだから、とかからかい甲斐がありそうだから、そんなことは全くもってありませんよ。ええ。

まずは一つ・・・。

「椛はあの子のどんなところが好きなんでしょうっか?」

あ、あの子グラスを割りましたね。後でお仕置きです。

「何のことでしょうか文様？」

私は仕事中以外で「様」と呼ばれることを嫌う。当然桜も良く知っていることである。

「随分な慌て様で。」

息を呑む気配。自らの失策に気付いたのでしょうか。ふふ。

「素直なところ……です。」

消え入りそうな声で言う椋は可愛いが、正直拍子抜けだった。

「それだけ……ですか？」

驚いた。もっと注意深く人を選ぶかと思っていたのだが。

「あ、あとは……目で語るところ……かなあ……。」

もじもじしながら尻尾を軽やかに揺らす椀。ずっと見ていたいけれど、言っておかなければならないでしょう。

「椀。」

「はい？」

「あの子は目で語ってなどいませんよ。」

ペンを椀の鼻元に突きつけて、私は得意気に言った。

わきみち

→

JUMP

→

感覚言語（後書き）

明日もテストだよ（ダンダン）

そのこっ 不可視の網（前書き）

お久しぶりです。

そのつ 不可視の網

「あー、こちらにとり、こちらにとり」

「あー、こちらにとり、こちらにとり」

静かな研究室に、私のどこか気の抜けた声が響く。

動作は良好だ。これなら店主も大満足だろう。

私は完成したボイスレコーダーが面白くて、色々な声を取っては遊んでいるのだった。

自分でも作ってみようかな、仕組みは理解したし、拾ってきた材料でも再現は出来そうだ。

と、キスメが興味ありげにボイスレコーダーを見ているではないか。機械に興味があるのは良いことだ。どうかの巫女なら

「そんなもの、言霊で事足りるじゃない」

なーんて、ロマンも何もあったもんじゃないコメントをするだろうよ。

伝われば良いってもんじゃない、形として残るから良いのだ。

「ほら」

私はキスメに、「ボイスレコーダー」を渡した。

キスメはコーヒーの入る音や、風の音を録音しては聴いて目を輝かせている。

あっちへこっちへとせわしなく走り回るその様はまるで人間の子供のようで。

私はただただそれを見ていた。

「？」

やがて、キスメは立ち止まった。

なにやら録音ボタンを押しているが、他に何も持っていない。なのにキスメは不思議そうに首をかしげているのであった。

そしてキスメは何かを書くと、私の方に持ってきた。

「私が話しても、とってくれない」

「・・・？」

この子は、何を言っているんだろうか。

—まって。

キスメの声を録音することは出来ないだろう。

—止まれ。

だって。

—きみは今までに一度だって、
声に出して話したことなんてないじ
ゃないか—

ふと気が付くと、キスめの姿はなかった。

「キスめ？」

私は必死になって研究所内を探した。厨房も、物置も、テーブルの下も。

「地底に戻ったとかいうなよう・・・!!」

私はきつと、触れてはいけないものに触れた。彼女の奥深くにある何かに。

―もう、わかっているんだろう。

私は、半ば放り出していたと言ってもいいあの桶を覗き込んだ。

どう考えても一人は入ることが出来ないその桶に。

キスメは、綺麗に収まっていた。

そのろくつ 殻。(前書き)

さあ、解き明かしましょう。

そのろくつ 殻。

桶は、元の状態に戻ったのだった。

いや。桶が戻ったというのは間違いかもしれない。私はようやく、この桶の仕組みを理解したのだった。

「そうか、不安だったんだね、あいつも」

随分と、皮肉なものだ。

「キスメ、ご飯はここにあるからね」

私は、地底に行かなければならない。

…依頼は、いつも桶に入っていたキスメが桶に入れなくなったから壊れた桶を治して欲しい…だったね。その点で見れば私は、依頼を達成したのだろう。

キスメは桶に入っている。もちろん、桶が変わったわけじゃないさ。

私は、こんなことを認めない。研究者としてではなく人、いや河童として認めるものか。

変わったのは・・・

「・・・。」

ここで、栲に遭遇した。悪いね、今は忙しいんだ。と通り抜けたいけれど・・・

「どうしたの？にとり、すごく怖い顔してる・・・」

まあ、これだけ苛立っていれば気付くなというほうが無理っただね。

「悪い、キスメを見て貰えるかな」

桜は一瞬表情を晴れやかにして、間もなく真剣な顔に戻った。おや、意外。もっと舞い上がるかと思っていただけれど鋭いね、見直したよ桜。

「
…わかった」

これで今のところ気掛かりは無くなった。

私は地底へと足を踏み入れる。ほぼ間違いなく、奴が出迎えに来るはずさ。

一際広い空洞に出て。

「来たのね、河童」

「どうも、裏切らないね」

さて、じっくりと話を聞かせてもらおうじゃないか……

そのななつ その不意打ちは（前書き）

なつやすーみin

そのななつ その不意打ちは

「黒谷…ヤマメ」

「ええ、私はヤマメ」

「誰もそんなこと聞いてないよ」

軽く肩透かしを喰った気分だ。本旨からズレちゃいけない。

「ここまで来たということは、大体の見当はついているのでしょうか？裏をとりに来た、というところかしら」

「わかってるなら話が早いじゃないか。古明地さとりを出しなよ」

「さとりさまを出せて？面白くことを言っじゃない。」

奴はふふん、と笑う。どこまでも人をくったような態度は氣にくわないね。

「面白い、とは？」

「さとりさまなら、あなたの目の前にいるわ」

「・・・・・・・・・・。」

神経を針のように尖らせて空間を凝視する。が私の目は黒谷ヤマメの存在しか確認することが出来ない。

私でも知らないような新しい技術でも用いているのだろうか？それともフェイク…奴の余裕は癪に触る。

「さとりさま、もう良いですよ。」

私は思わず身構えた。一体何処から来る？奴は目の前にいると言っていた。それが意味していることは…

それはまさに不意打ちと言えた。

黒谷、ヤマメ。奴の不釣り合いに大きなスカートが、もぞり、と動いたのだ。

「っ………!？」

果たして。古明地さとりは現れた。ああ、ヤマメのスカートの中からひよい、と顔をだしてさ。

地霊殿の主、古明地さとり・・・相手の考えを読み取る能力を持つ、強力なサトリ妖怪だと聞いていたが…こんなにユーモアあふれる人物だったとは・・・

「あ、いえ全然そんなことは無いんですよ!？」

ほら見なさい、とヤマメに文句を言う古明地さとり。私は一体何をしにここに来たのだったか。

「あの子…キスメの過去について確かめに来たのでしょうか、河白にとり」

ようやく本題に入ることが出来そうだ。やれやれ。

「そうさね・・・まずは、懺悔でも聞くとするかな」

「・・・良いでしょう。その前に、貴女はあの子についてどれくらいのことを知っているのですか？」

「んー、喋ってはいないのに喋ってるつもりでいることと、仮説だけれど私の考えが見えてる時があるってくらいかな」

「そう、それならば話は早いですね。」

そうして、古明地さとりは自らの過去を語りはじめた。

そのはちっ A 桶少女（前書き）

いつにも増して短いですが一旦区切りたかったので。なるべく早く
次を投下したい構えであります。

そのはちっ A 桶少女

その子がやって来た日は大雨でした。

ずぶ濡れで目も虚ろ、といった具合だったあの子を地霊殿まで連れてきたのは黒谷ヤマメ・・・正直意外でした。彼女が自分から進んで他人と関わることはここ最近ずっと無いことでしたから。

「悪い、さとり様、この子匿ってやって」

「断る理由がありません。あなたも体を拭かないと風邪をひきますよ」

「ふう、私に風邪ね・・・面白い冗談だよ」

そう言つて踵を返すヤマメ。親切心のつもりだったのですが・・・まあいいでしょう。今はこの子を介抱することが最重要です。さてまずは何か拭く物を・・・

「キスメ・・・」

「え？」

「私は・・・キスメ・・・」

「そう、キスメというのね」

「・・・!!」

途端、視界は白に塗りつぶされて、「キスメ」が浮いたのです。

「そう・・・わたしはキスメなんだよ」

いつのまにか少女は手に桶を持っていて。

もう、目は死んでいませんでした。

そのはちっ B サトリ（前書き）

まだ見てくださっている方はいらっしゃるのか・・・な・・・。

そのはちっ B サトリ

キスメは少々変わった子でした。彼女はいつも肌身離さず桶を持っています。

ヤマメの後にひよこひよここと付いて行くのだけれど、そのヤマメと言葉を交わすことは無く。

それでいて私とこいしの前で今日はヤマメちゃんがお花の名前を覚えてくれたとか、ヤマメちゃんはやとりがとっても上手だとか、心底嬉しそうにそんなことを話すのでした。

私もこいしも、そんな彼女を少し変わった子である、としか考えず

に毎日をご過ごしていたのでした。

そう。あの日がやってくるまでは。

あの日もキスメは桶を揺らしながら、私たちにヤマメちゃんがくれたんだよ、と頭に白い百合の花を刺してくるりくるりと嬉しそうに回っていたのです。

私は「それは良かったわね。百合の花粉は服に付くと取れないから
気をつけるのよ」と、キスメに返事をしました。

すると。

「お姉ちゃん……今、誰と話していたの？」

私はこの時まで、こいしが何を言っているのか理解できませんでした。

そもそもこの日のこいしは妙でした。思考を感じ取れないというか、
なんというか……

そう、まるで全てを無意識のうちにこなしているような。

キスメは不思議そうにこちらを眺め、「こいしちゃん、どうしたの？」と声をかけます。

こいしにはもう、何も聞こえていませんでした。

この時、二つの不確定要素が隠れ蓑となって、私の理解を妨げました。

しばらくして私はようやく一つの回答へと辿り着きます。

ああ、なんといつことでしょう。

キスメはただの一言も。

「話して」なんていなかったのです。

そのはちっ B サトリ（後書き）

遅れました。なるべく早くとか言っ
て今までで一番時間かけちゃ
いましたね・・・。

そのきゅうつ 着脱式精神論（前書き）

お久しぶりです！最初の投稿ペースはどこへやら・・・のほほん物語を

書きたいところなのですが・・・ははw

そのきゆうつ 着脱式精神論

私はさとの話を頭で噛み砕きながら、ひとまず一旦呼吸を整えることにした。

まずキスメは言葉を話しじゃない。これは誰から見ても明らかだった。しかし問題はここから、そう、キスメが「話をしているつもり」でいたことだ。

きつと、キスメはボイスレコーダーに自分の声が入っていないこと
でそのことに初めて気付いてしまったのだらう。

そう、キスメは心で会話が出来るのだ。いや、むしろそれしか出来
ない、というべきだらうか。

そもそもキスメの不幸はよりによって古明地姉妹に拾われてしま

った事だろう。勿論、この姉妹は相手の心を解すのだから、キスめとも自然に話すことが出来る。

毎日やっていることだ。それが特別な事だなんて夢にも思わなかった。やがて、原因はわからないが妹は現在の、つまり第三の眼を閉じた状態となり、キスめと会話をすることが出来なくなった。

キスめがそれを「自分の声が届かなくなった」ととらえたのかどうかはわからないが、ひとまずは、だ。

「そしてキスメは、桶に籠ったんだろ？古明地の」

頷くサトリ。

「で、キスメはどうやって桶から出てきたんだい？」

口を開いたのはサトリではなく、土蜘蛛。

「わからないわ。気が付いたら桶から出ていたのよ」

気が付いたら、ね。

よし、わかった。了解したよ。じゃあ、これが最後の質問だ。

「……私のところはキスメを寄越したのはどちらだい？」

そのきゆうつ 着脱式精神論（後書き）

のほほんな話書きたいんだよ（バンバン

ということ、出演させて欲しいキャラ募集します。

ぴんときたのを採用しますのでコメ欄にお願いします

更新頑張るよ！！ごゆるりとお待ちください

わきみち - H a l l o w e e n - 地霊の宴（前書き）

今回の話はわきみちになります。本編？なにそれ美味しいの的な
ノリでお送り致しますのでご注意ください！

わきみち - Halloween - 地霊の宴

「うんせ、ほいせ」

額を、頬を、汗がつたう。

暑い。

「よっっ・・・せー!」

重い。

早朝でも薄暗い地の底で・・・私は、頭を運んでいた。

なに、いつものことさ。

ただ、いつも運んでるものと違ってこいつらは生きちゃいない。

そう。言っならば頭の、代わりさ。

「ご苦労様、燐」

「はい、さとり様」

運搬は終わり、これからはショーの時間だ。

「ではヤマメ…やってください」

「はいよ」

さとり様の台詞を合図に土蜘蛛がナイフを突き立て、えぐる。ゾリッという音が聞こえた。そのまま次に手を伸ばし、繰り返す。

あれは、人が考えるより、硬い。

しかし彼女は器用なもんだ。手を止めることもなく、次々にその中身をえぐり出していく。

ぞりぞり、ぐりっ。

中身をえぐり出されたそれを彫るのは、橋姫。

器用さという点ではこちらも全く劣っちゃいない。彫り込み、くり抜く。心なしかその口元は微笑んでいるように見えた。

ふう。

そろそろお空も退屈しているだろうし、持ち場に戻るとするか―

「隣」

「はいさとり様」

「今日は祭です、貴女も残りなさい。ああ、お空も呼んで来ると良いでしょう」

祭。毎週のように催される宴会を除けば、地底で騒がしい日は珍しい。そんなに特別な日なんだろうかね。

「お隣ーっ！」

「にゃっ！？」

突然背中が重くなってつんのめる。しかし転ぶわけにもいかないもんだから、

・
・
・猫になる。

着地する。

素早く振り向く。

人型に戻る。

こいしを支える。

・・・この間、わずかに0.5秒。咄嗟の判断が出来ない奴は、現場で使い物にならないもんなのさ。

「私もお空迎えに行くー！」

「はいはいわかったから飛び掛かるのはやめよう」

地霊殿、という場所において古明石こいしはNO.2だ。しかし彼女は、その立場を理解していないというか必要としないというか、とりあえずさとり様とは真逆の行動をとることが多い。やりやすい、と言ってしまえばそれまでだが、なんだか複雑だね。

「だってだってー、ハロウィンなんだよ?」

「そう。そもそもそのハロウィンってのをあたいは知らないのさ」

「んつとねー、トリックオアトリート! ってお菓子をおねだりしてみても、貰えなかったらぶちのめすの!」

なんて物騒な祭だろう。

いやいや、さとり様が準備を進めているのだから、そんなはずはな

い。ない・・・よね。

「なんていうか、とりあえず勇儀には近づきたくない祭だねえ」

悪いね勇儀。

お空を連れて戻ってみるとほとんど準備が出来上がってるじゃないか。みんな仕事が早いねえ。

「そっいえばお燐はどんな変装するのー？」

腕をぶんぶんと振りながらこいしが尋ねる。どうやらハロウィンは変装しなければならぬ祭のようだ。

「あたいは化け猫だし、猫になつときゃいいさね」

「えー、つまんなーい」

つまんないて。

「わたしはジェイソンがいいなー」

お空詳しかったー！！

「あんなんでそんなに詳しいのさ」

「えー、だってさとり様楽しみにしてたし、外から河童も招くとかで話し合いしてたよ？」

あたいハブられてたー！

目から汗が出そうになるのを押さえつつ、皆の輪に入る。まったく・
・

地霊殿の生活も楽じゃないよ！・・・誰に言っただかね。

「さて、そろそろ河童とキスメがやってくるころです。みんな、予定通りにいきましょう」

さとり様の言葉にみな頷く。結局お化けの被り物をさせられた私も。

土蜘蛛はなんだかよくわからない赤い覆面を被ってるし、橋姫は白黒みたいな格好してるし、もう何が何やらわからない顔ぶれだよ。

そして、戸が開いたとき。

「トリックオアトリート！」

静寂。

河童は下を向いて震え、キスメは呆けた顔。

いやまさか今のでそんなに驚いたってのかい河童！？

やがて。

「ぶわっはっはー！」

河童、爆笑。

「トリックオアトリートだって！ハロウィンは明後日だよ！いやあ地霊殿の主も中々ユーモアに溢れているじゃないか！」

高笑いする河童。膝をつくさとり様・・・

「どついうことなの・・・」

地底妖怪達が呆気にとられる中、キスメが河童の袖を引き、何かを見せると、河童の顔がこわばる。

書いてあった言葉は。

「三日後、だよ」

わきみち - Halloween - 地霊の宴(後書き)

はい。ハロウィン小話でした。いや、オチがひどいw

本編のほうも頑張りますのでこれからもよろしく願いますです
(

そのじゅう 釣瓶落とし。(前書き)

お待たせしました。

そのじゅうつ 釣瓶落とし。

私は桶に籠りきりで、いつも一人でいた。

最初から一人だったなら、妖怪も「寂しい」とは感じないみたい。

私はほどほどに驚かして、食べて、眠っていた。

意味なんて、ないんだよ。

それがわたし。一人の釣瓶落としとしての在り方。

私はキスメ。

釣瓶落としには字がないの。なんでも字を切り離しておかないと迷

い無く人に落ちることができないからなんだって。

そう教えてくれたあの人はは、「今日は宿敵を驚かしてやるんだ」

と言って、帰らなかった。

私は、一人になった。

あれ？

なんだかおかしいよ？

一人だった。

一人になった。

この間には一体誰がいたっていうんだろっ？

私は考える。

桜さんが何か、言ってる。

私は、返事を持ってない。

私は話ができないから。

河童さんは、良い人だよ。樫さんも、良い人だよ。

私は、お話がしたい。

「キスメ」

それは懐かしい音。

名前も知らない、一人の釣瓶落とし……

そのじゅうつ 釣瓶落とし。(後書き)

ここからちょっと投稿加速すると思います。

一つだけ・・・

「新キャラ注意」

そのじゅうちっ 鍵。

「…………あたしだよ」

手を挙げたのは——土蜘蛛。

「…………理由を、聞こうか」

「ちてね」

「なう当ててやるつか」

「・・・・・・」

「キスメに負い目が、あるんだろ？」

「・・・・・・・・負い目なんか・・・・・・・・」

わかりやすいやつ。

「だってお前、キスメから目を逸らしてた」

キスメが大変だ、って頼みにきてるにも関わらず、だ。あの時はただ、疑問だったけど今ならわかる。

こいつは何かを隠そうとしてる・・・それは間違いない。

でも。果たしてそれは、聞いてしまっても良いものなのか？

今まで考えていたものが、根底から覆されるかもしれない。

知らないことへの不安。

知ることへの不安。

——キスメは何も知らない。

うん。選択肢は一つだ。

「ここまで来たんだ。聞かせて貰うよ、その答えを」

「・・・・・・・・っ！」

サトリはただ、見るだけ。でもきっと彼女は知っているのだろう。
いや、知らなくなったら、今、ありありと見えているんだろうさ。

するじ。

「お前、その胸の鍵が何だか知ってるかい？」

突然、そんなことを聞かれた。

「鍵……これなら母さんから貰った鍵だけどこれがどつかしたかい？」

私は鍵を揺らす。

平静を装ったつもりだけれど、確かによく考えてみたこともなかった。一体これは何の鍵なんだろう。

好奇心が膨れ上がるのを感じた。悪い癖だ。この状況で出てくる代物なんだ、良い事はまずないだろうよ。

私は、次の言葉を待った。

「それは……ミキナの鍵だ」

そのじゅうちっ 鍵。(後書き)

投稿が加速すると言ったな、あれは(r y

はい、予告通り新キャラの名前が出ましたね。次の話はほぼ書けるので

今度こそ早い・・・はずですー。D)()

新キャラ出すって言ったとたんにお気に入り数がぴょんつと減る辺りやはり皆様シビアですねw

読んでくださる方がいる限り、私は書き続けます。

あ、実は結構前からなんですけど、挿絵を描いていただけの方募集してますー

以上ですっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6053u/>

にときすっ！

2011年11月29日15時53分発行